

小説

碧空の航跡 — 情報安全局・go.jp —

稲瀬 隆

Scene 1 プロローグ

南国特有の、奥行きを感じるような深く眩しい真青な空。2月初旬とはいえ南の島にはもう春の気配だ。鹿児島から高速船で1時間半ほどの距離にある多賀根島には、その青空に描かれる白い航跡を見るために、多くの人が集まってくる。丘の上の公園からは、遠く湾を隔てた向こう側に、ロケットと発射台が見える。先端科学の構造物が緑の丘を背にし、ターコイズブルーの海に向かって立つ様は、なぜ

か子供映画のセットのようでもある。

風に乗って聞こえてくるカウントダウン。やがて轟音と白煙を上げて徐々に浮き上がる巨体。ぐんぐん速度を速め、うねる一条の煙を残して、やがてあなたの一点となり、視界から消える。集った人々は、シヨウを見届けた満足感と成果への期待を抱きながら、思い思いの方向へ散ってゆく。そしてその後の成り行きは、ニュースで知る。

2015年2月10日 日毎新報 朝刊1面

宇宙船「もやい」、再び失敗

宇宙計画推進協会（JASPA）は5日未明、多賀根島からMH3ロケットで打ち上げた宇宙船「もやい」が、国際宇宙ステーション（ISS）軌道への投入後の再点火テストで制御系に生じた深刻なトラブルのため、モジュールに分解後、大気圏突入の軌道に移されたことを発表した。投入失敗は3度目である。「もやい」は、スペースシャトル廃止後ISS計画を支えているロシアの宇宙船「ソユーズ」の代替機として期待されていた。3人乗りのソユーズは6体制のISSに2機常駐し、緊急脱出機としての役割も担っているが液体燃料式のため寿命が200日しかなく、寿命が長い固体燃料型推進エンジンと姿勢制御用イオンエンジンを搭載した「もやい」は有望な次世代機だった。わが国の宇宙ビジネスを牽引する要として期待されていただけに、関係者の衝撃は大きい。

同日同紙3面 ベタ

政府 サイバー・セキュリティに本腰

政府は、巧妙化するインターネット犯罪やいわゆるサイバーテロなどに対処する本格的な独立機関の設置を公表し

た。急速に高度化が進む情報処理技術は、今やあらゆる面で社会基盤の一部となっており、そのトラブルは日常生活の安全を大きく脅かすことになる。情報漏洩、フィッシング、サイバー攻撃などのネット犯罪は年々高度で悪質なものとなっており、もはや個々の企業や個人のレベルではとても対処しきれない。そこで従来、内閣官房情報安全センター（NICS）や警察庁、検察庁、防衛省、文部科学省などに分散してきた情報安全対策のノウハウを一元化し、先進のIT技術と捜査権とを一体化させた体制を作ろうというものだ。政府は、とりわけ国家や社会に大きな影響をもたらす課題から優先的に取り組んでゆく方針だ。

Scene 2 スナック 飛遊石

アイスピックが氷を突く音がする。すこし音を絞った通信カラオケが、アジアン・ポップに合わせて踊る、足の長い女性歌手を映している。そのモニターのすぐ下で、3人の若い男たちが口数も少なく、ハイボールを飲んで話の内容から、彼らがこの店からさほど遠くないところにある、JASPA・多賀根島宇宙センターの研究員であることは、容易に推測できた。先の打ち上げ失敗からおおよそ3ヶ月、洋上での機体回収からコンピュータに残るデー

夕の照合まで、原因究明に忙殺されてきたこと、ようやく昨日、本省の調査委員会に報告書を提出したこと、などが彼らのぼやきから酌み取れた。

店内には他に客が居ない。この島の南部では数少ないカラオケ・バーだが、今の時期、トビウオ漁で忙しい漁師たちは明日に備えてとつくに寝ているのだろう。平日の夜では役場の者も学校教師たちも居ない。

マルーンのドレスを纏ったママは、男たちの話から距離を置くようにカウンターに寄りかかり、アイスジャヤーが満たされるのをただ見つめていた。無口なバーテンは中央アジア風の容姿で、肩幅がやけに広い。

「遅くなりましたア」

はずんだ若い女の声が、重く淀んだ空気を払った。最近、街中ではちよっと見かけなくなった、派手なブロンドのカーリーヘアだ。ママはその声に救われたような笑顔を向け、男たちに話しかけた。

「紹介するわ。林マリさん。先月やめちゃったヤンちゃんの代わりなの。」

ブロンドが朝日のように薄暗がりをよぎり、男たちのテーブルについた。

「マリ“リン”って呼んでください」

「東京の方なんですか？」

「まあ。でも正確に言えば、すぐまた名古屋行きなんだけどね。」一人だけYシャツにネクタイ姿の男が応じた。

小柄な男がそれに割って入る。

「こいつは茅原、オレ、番場。ヨロシクね」

「皆さん、宇宙センターの方たちなのよ、日本の頭脳って感じでしょ！」ママが持ち上げると、マリリンが胸元で小さく拍手しながら「すごーい！！」と声をあげる。それに浅井が笑顔で応えた。

「どうする番場？日本の頭脳！落ち込んでらんないぞ」

「そ、落ち込んでる場合じゃない！」番場の横顔は、ほんの2、3分前とは別人のようだ。

「なにか景気づけに開けますか？」ママの誘い水に茅原が、「じゃ、シャンパン・・・、って言ってもどうせないだろうから・・・」

「あら、うちだっってとっておきのドンペリくらいあるわよ」

「とっておきのは次の打ち上げ成功にとっておいて、この前の美味しいカヴァ開けて！」

ポンツ、と心を軽くする音が淀みを払い、フルートグラスを揺れのぼるスペイン・ワイン細かい泡が、再び乾杯の

屈託ない笑顔がそう言うと、男たちから好意を込めた失笑が漏れた。

「I wanna be loved by you...でも歌くてももらおうかな・・・」

背の高い一人が笑顔で近寄り、空のグラスを渡した。

「おれ浅井、よろしくね」

「じゃ、お近づきに。。。頂きます」

マリリンは自分で手早く作ったソーダ割りに軽く口を付けた。

「皆さんは職場のお友達？ 今日は何かの“打ち上げ”、か、なにかですか？」

男3人の笑顔が一瞬こわばり、ママが息を呑んだ。すぐさま声をあげたのは浅井だった。大声で笑いながら、

「そう、まあ、打ち上げだよ、打ち上げ！ 次に向けての、なっ？！」

「ま、そういうこと、かな！」と少し小柄で丸顔の男が合わせた。

凍った空気が一気に解け、ママは安堵の息を吐き、男たちに笑みが宿った。小柄な男が言葉を継いだ。

「昨日、厄介な仕事が終わってね、明日こいつが東京に帰るんだ。」と、3人目の男の肩を叩く。

輪を誘った。

テーブルから殻だらけのナッツボウルや、乾いて反りかえったダニ付きチーズが下げられ、旬のミズイカのバター焼きやトビウオの唐揚げが並んだ。3人の男たちはマリリンとママを囲んで、少し饒舌になった。とくに新入りのマリリンは、宇宙工学のよい受講生だ。深くうなずきながら、中学校レベルの理科の知識や日常経験をもとに質問を挟み、一生懸命、男たちの話に付いて行こうとする。

国際宇宙ステーション計画には米・ロ・EU・カナダと日本が参加している。これを10年以上、中心となって支えてきた米国のスペースシャトルは、多大な業績とともに、2度の爆発事故によって反復利用可能な飛行体宇宙船のリスクと非効率性を実証して、2011年に全てのプログラムを終えた。現在、宇宙ステーションでの有人活動を支えているのは、ロシア製の使い捨て宇宙船、ソユーズだ。シンプルな構造と30年を超える実績を持った、コストパフォーマンスの良い宇宙船である。ただ“有効期限”の短いのが問題だ。人員交替の時だけでなく、宇宙ステーションでは万が一に備えて、常に脱出用の宇宙船を備えておかねばならない。これを担っているのも、毎年打ち上げられて交換されるソユーズなのだ。安価で安定した構造

だが、スラスターと呼ばれる推進・姿勢制御系に過酸化水素を積んでいるのが難点である。宇宙での管理が難しく、安全飛行の保証期間は200日しかないのだ。

「ぼくらが打ち上げた“もやい”はね、固体燃料エンジンとイオンエンジンを積んでいて、寿命がその何倍もあるんだ」番場が得意げに言う。

花火職人たちが積み上げてきた火薬技術が活きる固体燃料系エンジンと、ハヤブサで“しぶとさ”を実証したイオンエンジンとは、どちらも日本のお家芸のはずだった。

「なんで、また、失敗しちやったんですか？・・・あ、ごめんなさい・・・」

「いいんだよ」浅井がとりなす。「新技術なんてやつは、成功率が3つにひとつあれば“御の字”なんだ。日本のこれまでの成功率は国際的に決して低いものじゃないよ」

「ロケットなんて、究極、ギリギリの乗り物だからね」茅原がつぶやいた。

「それって、どういうことですか？」

マリリンの質問を、ママが得意げに受けて、茅原の顔をのぞき込んだ。

「宇宙船やロケットは究極の使い捨てマシン、なのよねー？」

番場がマリリンの視線に入るように体をひねった。「つまりね、余分なものは目いっぱい削り取った設計、難しく言えば、安全係数を1・2とか1・3とかにギリギリまで絞り込んだ作りなんだ」

そもそも地球の重力を振り切って何千kmも上空にモノを打ち上げるロケットは、その大部分が“燃料”である。

それ以外の部分は極力軽くし、切り捨ててゆくのが合理的だ。スペースシャトルの失敗は、再利用の発想にあったとも言える。

「自動車だったら、2人乗りでもその人の百倍くらいの燃料を積んでないとダメっていうことですね？」

ロケットの厳しさを少し理解したマリリンが、数字を入れて聞いてみた。

「いや、自動車自体の重さを考えたら、その何倍も積まなけりや、座席も車体もステーションまで運べないっていうことだよ。」

番場の返答にマリリンは「ふーん」、と深く相づちをうって、「ロケットの設計ってすごい。皆さんは未来を背負ってるんですよ」

番場が満足そうにうなずき、それを見て茅原と浅井が笑った。

「一曲、いこうか」

浅井の提案に、番場がタブレット・フォンを取り出したタッチを3，4回繰り返すと、ステージに置かれた通信カラオケの音量が上がリ、メニュー画面に変わった。

「すごい、そのスマホ！ なんで？」

「常連さんの特権よ」

ママが笑った。WiFiネットワークでコントロールができるようにしてあるのだという。

「番場さんで、もしかしてパソコン・オタク？」

「それほどでもないよ。茅原の方がおれより詳しい。いつもノートPCを手放さない！！」

「オタクというほど、ハマってないよ」茅原がちよっぴり心外そうに答えた。

「あたしのスマホも、そんな風にできますか？」

「ああ、たぶん。ちよっと時間かかるかもしれないけど・・・」少し照れながらも誇らしげに番場が答える。

「じゃまた、番場さんのお時間があるときに・・・ということ、番場さんのメアドおしえてください・・・そだつ、みなさんツイットしてますか？」

「いや、もう飽きたな・・・」浅井が言う。

「いまは占いかゲームとか、面白いサービス、いっぱい

リンクしてるんですよ！ やりましょうよ！ さ、みなさんのケイタイ出して？」

マリリンははしやいでいる。

「赤外線でメアド送りますから、空メ下さい。メール送ります。フォロアーになって下さいね」

「あらあら・・・」と苦笑いするママを後目に、3人の男たちの携帯電話にはマリリンのメールが送り込まれた。

「じゃ、そのURLからわたしをフォロアー設定してください！！ヘンなサイトじゃないですよ、わたしのブログのフォロアー登録ですから！！」

男たちは苦笑いしながら、早速送られてきたメールのURLを開いた。特別変なアプリをインストールされるわけでもなさそうだ。フォロアー登録を受諾してページを開くと間もなく、マリからのツイットが飛び込んできた。2，3年前とはずいぶん様子が違う。

「マリリンです(o)~* グループ設定しますのでDMもよろしく！！パブリック設定もいいですか？」

番場がさつそく「こちらこそ。テニスのグループにどうですか？」と打ち込んだ。ツイット・ブックも年々、機能が追加され、今ではGOO・プラスのように通信範囲を階層化できるようだ。

マリリンが手元の画面をのぞき込んでから、番場に向き直った。

「番場さん、テニスもやられるんですか？」

「ボクらはみんなやるよ。3人とも」番場がすこし得意げに言う。「まあ、一番ウマイのは浅井で、ボクは3番目だけだね」

「こいつは高校球児で剣道2段・・・」茅原が横目で浅井を指して言うとな本人が

「なんでも振り回して当てるのがウマイってわけ。」とイタズラっぽく流した。

「今度、ゼヒ誘ってください・・・」マリリンが念を押した。

「うん、わかった。」笑顔で答えた番場が、ふと真顔になった。「ところでさ、ツイットもいいけど、スマホで写真撮ってまいたりすると、エライ目に遭うことがあるらしいよ」

「どうしてですかあ？」

「ジオ・ログっていう位置情報が埋め込まれるから、スマートフォンにあつたりする危険がある・・・アイドルが自宅で撮ったペットの写真ばらまいて、ひどい目にあつたて」

「わー怖い！！」

「結局、引越すはめになったらしいよ」

「オモシロいモノ、ベンリなモノ、みーんな、なんか落とし穴があるんだ、って」

浅井がそうまとめると、番場がため息を押し出すように言った。

「引くよなー、そういう悟ったような発言」

茅原はただ黙って笑っている。

ひとしきりツイット・ブックの話題が盛り上がって、カラオケの選曲に入った。誰かが2000年代に再結成されたバンドの80年代の懐メロ・ロック”The Final Countdown”を選んだ。前奏が流れ始めたところで、番場がつぶやいた。

「おれ、まだ納得いかないんだよね。今度の“実験結果”・・・」

男たちは“失敗”という言葉を使わない。

「噴射でやられたとこ前と同じだろ？ 再実験して係数、計算し直したよな。。。」

“最適化の誤謬”、ってことじゃないか・・・茅原がつぶやく。

「そう、最適化された部分(パーツ)の総合が最適とは限らないんだからさ・・・だいたい宇宙じゃ何が起るか分かる

らない、って」浅井が言う。番場はお構いなしに続けた。

「サーバーに残ってるデータとか、燃焼実験に見てたモニターのレコードデータに間違いはないみたいんだけど、センターのデータ処理パッケージで出した値とX・CELLでの概算データ、ちよつと違うんだ・・・」

「なに言ってるんだよ、今更。X・CELLなんて一般向けの計算ソフト、統計値が不正確だなんて昔から有名な話だろ？」茅原がそつげなく切り返す。

「そりゃオレだって知ってる、でも、X・CELLもずいぶん改良されて多重計算でも倍精度、4倍精度が選べるようになったから、ちゃんと使えばそれなりの数値は出るさ、時間はかかるけど」

「じゃ、なにか？ センターのデータ処理系にモンダイがあるとしても？」

「おれ、実は、先週、情報安全局にメールで調査を打診したんだ。。。」

「はああ？ 単なる思いこみかもしれないの？」茅原が言う。

「気の早いヤツだなあ、・・・それで？」浅井があきれながら尋ねた。

「・・・まだ、何も返事がないけど・・・」

「そりゃ、そうだろ、証拠がキハクだよねえ」

浅井と茅原が笑うと、番場はひとり、気まずく口を閉じた。

「そんな。なんだか難しそうだけど、カンって大事じゃないですか、ね？番場さん！」

マリリンが番場をかばうように首を傾げて微笑んだ。

軽やかなカールが揺れて左の頬に小さなほくろが見えた。番場にはそれがとても愛おしく見えた。

Scene 3 着任

「おはようございます！」

自転車に乗ったまま浅井がJAPSA宇宙センターの正門ゲートでIDカードを読み取り機にかざす。その声に応えて実直そうな長身の門衛がにこやかに敬礼を返す。門衛所の中の一人も座ったまま、軽く敬礼を返している。

センターの敷地は、南北約2km離れた2つのエリアに分かれている。それぞれが山を背にした岬にあり、北エリアには大型ロケットの組み立て施設や発射塔、南エリアには一般開放の展示館に隣接して、小型ロケットの基礎研究施設や発射塔がある。浅井たちが勤務している固体燃料推進系の研究セクションは南エリアだ。南エリアの主要な

ゲートは2つあるが、そのうちひとつは大型機器の搬入などの時以外は閉めきりである。研究開発上の機密保持、というより、大量の火薬を扱い、巨大な燃焼機関を扱う施設としての安全保持のため、敷地への出入りは厳重に管理されている。とりわけ打ち上げ前後の警戒は厳しい。

ゲートを抜けて道なりに北に300mほど進んだところに、3階建てのC棟と4階建てのD棟が並んでいる。どちらも研究施設にはこぢんまりした建物で、C棟はかなり古びている。浅井はD棟のエントランスで再びIDカードを読み取り機にかざした。カメラに向かって軽く会釈しながら「おはようございます」と声をかけると、スピーカーからまた挨拶が返され、ガラスの扉が開く。以前はここにも守衛役の受付がいたが、今はカメラでの遠隔対応だ。ホール右手の階段で3階まで上がり、いちばん奥の部屋が推進系設計部の彼の机があるN301だ。70平米ほどのフロアには所狭しと机やラックが据えられ、およそ30余り大小のディスプレイが各々の方向を向いて設置されている。壁面の管理図やホワイトボードに貼られたパーツの設計図がなければ、ここが何を目的とする部屋なのか分からない。

「おはようございます」

保だった。だが浅井は、3度の事業仕分けを経て人件費も大幅削減された当所にそんなゆとりがあるのか、といふかった。

少しは期待していた宇宙船「もやい」の文字はまだどこにもない。次期計画に向けた予算獲得プランが容易に立ち上げられないのだろう。浅井は気持ち切り替えてこの夏、シカゴで行われる国際航空科学会議ICASで発表するデータの整理に入った。締め切りまではまだ1ヶ月ほどあるが、最終稿のウェブ送信の前に、部長経由で知的所有権審査部門のチェックを受けなければならない。国際競争の中にあつて最先端分野の研究成果は、対外的にも国内向けにも常にアピールし続けなければならない。しかし同時に、どこまでを見せて、どこからを隠すのか、特許権も睨みながら、細心の注意が必要だからだ。

昼休み、遅めの昼食をとり食堂のある本部棟に向かった。晴れた日の海の輝きは、無条件に心を癒してくれる。

C棟の前ですれ違った番場は、

「いよいよ来たね」

と、満足げに浅井を見上げた。

目があった同僚と軽くあいさつを交わす。毎朝出会う顔ぶれは同じとは限らない。研究所での勤務は公務員に準じ、原則1日8時間勤務のフレックス制で、出勤はゲートでの出入りで記録される。各自の月単位、年単位の出勤は自己管理で、勤務時間はカードで記録される。コアタイムの在席は努力義務だ。規則では残業は上長の命令書がなければならず、時間外労働は1年360時間を越えないように監督官庁から指示されている。だが実際のところ、実験や研究ではそんなルール通りには事が運ばない。予定外の事態も起これば、アイディアが湧いてきて急に実験や分析をやりたくなることもある。宇宙やロケットが好きで集まった精鋭たちだ。土台、法律家の理屈通りに働けるわけもない。

浅井はPCを立ち上げて自分のデスクを離れ、コーヒーを片手に戻ってきた。所内連絡とメールのチェックから始まるのが彼の日課だ。

“JAPSA・Net”と表示されたブログ型のページのセンターに、「人事：調査役の着任」という掲示があった。本省ならば調査役は室長と同等のスタッフ職だ。もちろん、省と管掌の財団とでは月とスッポンほどの差があるのだが。かつてこの手の人事は、天下りのための指定席確

「LIESA（リーサ）っていうんだって、情報安全局の特別査察官。昨日、ネットで調べたんだ」

調査役を、情報安全局からの派遣人事だと信じ切っているようだ。

「ところで掲示板にあげていたんだけど、今度の日曜のテニスくる？ 2面とも取れるみたいだよ」

「ああ、今回はやめとくワ」

番場は瞬時、空を見てから、

「そうだ、マリリンちゃんに声かけてみよ！お休みの日だったハズだし」

「なんで知ってる？」

「あれ？マリリンちゃんのツイット見てないの？」

「ああ、あんまりね。着信コール、セットしてないし」

「彼女、お前が甲子園球児だったって教えたなら、すごい興味もつたぞ、おいっ！」

「くっ、また余計なことを・・・」大学時代の剣道漬けの日々は、甲子園でのトラウマから逃れるためだった。最大のチャンスで回ってきた打席に、リトルリーグ以来の悪癖、悪球打ちが出て凡退したのだ。相手が故意に外したボールをきれいに打ち返す、その快感が記憶の深層から蘇ったに違いなかった。

浅井は自席にもどるとパッドPCを取り出した。ネットからダウンロードしておいた、アメリカのサスペンスドラマを見るためだ。日本の官公庁で秘密漏洩事件を引き起こした元凶、P2Pのデータシェアソフトによるもので、著作権法に違反する。だが、彼に罪の意識はほとんどない。ダウンロード用のPCは独立したアドレスで管理され、漏れて困るような情報は全く入れていないので、“大丈夫”と信じ切っている。

午後3時過ぎ。ICASに出すデータの整理が一区切りついたところで、浅井は再来週の筑波出張の手続きのため総務課に向いた。見回したが顔なじみが見当たらない。この春に古株の女性が二人やめ、派遣社員に代わった。およそ全ての事務作業がオンライン化され、慣れない仕事が辛くなったこともあるだろうが、つまるところ高齢な正規職員の退職勧告で人件費削減が図られたということだ。

「これ、誰に出したらいいのかな？」
入り口に一番近い女性に声をかけた。
「あ、旅費の請求ならわたしです。」
ひつつめヘアに黒ぶち眼鏡。20歳代のようにも見えるが、まるで若い女性のオーラがない事務員が、振り返りも

せずに、そっけなく答えた。紺色の事務服は擦れた袖口から糸が出ているが、気にするそぶりもない。

「初めて、だね。浅井です。」
「足立華子です。どうぞよろしくお願いします。」
低い声でそう答えた女は、ほんの1秒たらず手を休め、顔半分をこちらに向けて頭を下げ、すぐまたモニターに向き直った。どこかリヤドロの少女像にも似たプロフィールなのだが、まるで愛想がない。

机の左手に請求書や納品書が山と積まれている。経理から管財までの一元オンライン化が叫ばれ、これまで幾度となく半端なシステムが導入された。全てのことを電子の「ハコ」の中で処理できるかのような幻想が、業者によって吹き込まれ、そのたびに「ハコ」の外側で不都合と混乱が生じた。今回のシステムもそうならない保証はない。積みあげられた書類が、前システムの“遺物”なのか、現システムから吐き出された“汚物”なのかは分からない。

女の視線が機械的に書類とモニター画面を往復し、それとは別のリズムで両手の10本の指が、競い合う2つの生物のように動き続けている。かなり早いタッチだ。今日日、派遣でもワープロや表計算の級くらい持っているのだろう。手元を見ると最近、お目にかからないトラックボー

ルがある。

「ハリントンのだね、なつかしいねえ。」
女は無言でほんのわずかに、それも一瞬だけ、頷いた。
「ぼくもマウスが嫌いで、トラックボール派だった・・・」
・・・と、そう話しかけたところで、微動もしない無言のバリアに、言葉が萎えた。

と、なにかが気になった。ちよつとまでよ、タッチの速度ほどには画面での文字列が延びてゆかない。ミスタッチが多いのだろうか。それとも、入力以外の操作を“なか”加えているのだろうか。

『まさかね』と思い直し、まるで反応のない女に念を押すことにした。
「じゃ、確かに頼んだよ。5月25日月曜の・・・午後1時10分、ねー！」
そう言い置いて去る浅井の脳裏には、横顔のきれいな輪郭と、それに似合わぬ低い声とが焼き付けられた。

Scene 4 Q o o c

外部通信モニターにレポートが入った。

* 2015.5.25,13:9:30 No.12

2p set in venues.

Main BS 10PB' 0.2PIOPS' priv. cld. LAN closed
with sub-S:NT open ltd. to pub.sub-sys.*

モニターを覗んでいる男が、「了解」と低くつぶやく。胸のプレートに『主任・飛田』とある。その背後に、肩はばが広い大柄な男が近寄った。両の鬢にだいぶ白いものが混じっている。調査室長の中洲だ。

「No.12, Queenからか。音声変換してくれ」
抑揚の乏しい女性風の合成音声モニター・スピーカーから流れてきた。ひとむかし前のボーカロイドのような金属臭がないのは、おそらく本人の声をサンプリングしているからなのだろう。

『2015年5月25日13時9分30秒報告。本日2人目の現場配置完了。研究所には高速・大容量のブレード・サーバー・コンピュータがあり、プライベート・クラウドを構築しています。』
室長が頷きながら、つぶやく。

「さすがQueen、もう内堀の中まで入ったか。。。」「
モニターが続ける。」

『所内メインシステムのネットワークは独立で、系列研究所を含め外部からの直接アクセスは不可能です。eメールはwebメールの転用で、外部サーバーに依存していて、

インターネット用のプロキシは独立です。一部の部署は外部のクラウド・ベンダーを契約して、パブリック・クラウドでデータ処理を行っています。独立回線、専用PCのためメインシステムとの共存はありません。USBなどの媒体は全て管理システムにリンクした貸与物品に限られ、個人の所有品は接続を禁じられています。これまでのチェックではこの1年、これら経路から侵入されたような形跡は確認できません。』

「今回の件はシロかな」と、また室長がつぶやいた。

メインシステムは所内でクロスドのLANからしかアクセスできないはず。ここにウイルスが感染したとすれば、だれかが所内のPC経由で持ち込んだことになる。単なるウイルスならUSBメモリーでも“伝染”するが、すべての周辺機器について接続管理が厳しいのなら、その線も可能性が低い。しかしそんな状況でもハッキングは行われる。

2010年にイランのウラン濃縮装置を混乱させた妨害プログラム“スタックスネット”は、遠心分離器が一定速度になると作動する、極めて高度なウイルスだった。しかもそれは、完全に閉じた核施設のネットワーク内に侵入したのである。メールやUSBメモリーなど、何人かの手

ない。

「打ち上げの妨害なら、飛行制御を妨害する方が手っ取り早いんじゃないでしょうか？」

「いや、毎回の打ち上げを、ジャミング（信号攪乱）などで妨害するのは、あまりに露骨だ。対策も立てやすい。むしろ、開発そのものが失敗だと思わせるような妨害が一番、敵の意欲をくじくし、効果がある」

もし計画的な侵入・妨害者が“ライバル”だとすれば、目的は二つあるはずだった。ひとつは実験データの入手、他の一つは実行の妨害である。多大な労力と時間を要する数々の基礎実験データを横取りすれば、自分たちの技術開発は格段に速くなる。それに加えて、ライバルの実施計画を、もつとも目立つ最終段階で打ち砕けば、これ以上のダメージはない。

「すると、例えば基本データ処理プログラムのような部分の改ざんが、気付かれにくい分、効果が高い、ということですね」

「そう、ボディーブローのように効いてくるだろう」

ロケットの部品はそれぞれ、ぎりぎりの安全係数で作られている。それを組み立てた総体としての“ゆとり”は、ちよつと大きな“ゆらぎ”が起これば、簡単に吹き飛んで

を経て潜り込んだと推測されているが、エージェントや協力者、または”無意識の“協力者が手助けしたと考えるのが自然だろう。

合成音声が続ける。

『ただ、内部からのアクセスが異常な時間帯にあります。疑われている一連のデータ処理プログラムは、ディベロパーによる追加供給を含め、ここ2、3年の間にも何度も変更されています。既存プログラムとリンクするよう作られたオリジナル、例えば1998年、オープン統計パッケージJmとリンクするよう作られたプログラムも同様です。』

「プログラムのバージョンアップって、普通のことじゃないですか？」飛田が振り仰いで尋ねる。

「開発元から改訂版の売り込みはよくあるし、修正や機能追加の供給も珍しくはないな。ただ、個人が作ったプログラムを、他人が後から変更するのはかなり難儀するものだ。10年以上前に一度完成して共同利用を始めた統計用プログラムが今更、繰り返しマイナーチェンジされるといっては、不自然にも思えるな」

閉じられたシステム内でプログラムが書き換えられたとすれば、内部の人間が何かしら関与していることは間違いない。

「データ処理のプロセス、とくにオリジナルプログラムに入り込んだ“虫”となると、除去が厄介だな。」

今日、高価な市販ソフトは、改ざんされれば容易に検出できる構造になっている。しかし、先端技術のデータ処理では、自作の計算処理プログラムを市販ソフトにリンクして用いることが少なくない。それでも純粋に数学的な処理の“過ち”ならば、検算や他ソフトとの比較など、面倒だが対処の方法がないわけではない。しかし、工学分野でしばしばあるように、式に組み込まれた定数が一定のデータに基づく“経験値”となると、基礎データの吟味からやり直さねばならなくなる。

モニター音声が続ける。

『セキュリティ上の大きな懸念は、東都大学時代に燃焼や制御の実験装置に繋がっていた旧いサーバーです。これがサブ・ドメインとして現サーバーに継ぎ足し設定されています。ここには固体燃料系エンジンの基礎データのほか、当時最先端だった燃焼制御の大きなシステムやセンサーの複合体が一部、未だに使われており、廃棄できないようです。限られた所員は今も利用しており、外部からのアクセスもあるようです。』

「典型的なレガシーだな。規模は小さいが。」室長がいうと飛田も頷いた。

“レガシー・システム問題”それはこの国の急激なIT進化がもたらした深層の歪みであり、アキレス腱である。40年ほど前には「大型電子計算機」が、30年前には「ワークステーション」という「パソコン」を繋いだシステムが、工場では「FA化」、オフィスでは「OA化」の波に乗ってなだれ込んできた。各企業、各機関が多額の投資によって最重要ラインから順に「電算化」を進めた。しかしその後の電子技術と情報処理技術の早すぎる進化とそれに伴う混乱は、その時々想像を超えた、激烈なものだった。高価な最先端の生産設備や測定機器が、“付属部品”であるはずの計算機の世代交代のために、3、4年で”老朽化”した。”劣化を知らぬ磁気信号”に変換された次世代への記録さえも、磁気媒体の交替によって断絶した。結果、比較的容易に新システムへの移行ができるオフィス分野はともかく、機械の制御を含むような生産ラインや巨大な機器を操作する研究分野では容易に代替ができず、古いコンピュータやシステムを継ぎはぎで使う羽目になった。高度に情報化した社会は、それに引きずられるように変遷を続け、もはや連続的ではなく、引きちぎられる

がら変貌を続けているのだ。インターネット犯罪はそうした“スキ”もついで増殖を続けている。

モニター音声が続いている。『旧システムのサーバーにバックドア(裏口)がある可能性は否定できません。悪意か善意かは別として、施設スタッフ自身がセキュリティ・ホールである可能性もあります。内部に“問題者”や“協力者”がいる場合、あるいは、内部からのアクセスがなんらかのトリックや”なりすまし”である場合、双方に備えて、まずは所員全員のアカウントについて通信状況を監視します。』

音声が続いて聞かされた。『とくに旧システムに関係するグループ16名は、行動もチェックします。そのうち、利用頻度の高い、浅井祐太郎、番場 仁、茅原孝司の3名にはすでに“位置情報”通知システムのA、B、Cをそれぞれセットしました。今後、彼らを符号で報告します。新旧併用システムを頻繁に使用しているのは、AとBです。Cは三ツ星重工のエンジン開発スタッフですが、プロジェクトごとに短期出向でセンターに來ます。今回は打ち上げ時前の最終調整のために來ていました。』

「通報者は容疑者から外しますか？」と飛田。

「いや、スパイに対する『無為の協力者』という場合もあるし、こちらの内定に気付いて、ひとつ先手を打ってきた可能性だってないわけじゃないだろう。この中の誰かのPCが、ボットでゾンビ化している可能性も考えなければ」

ボットウイルスは、感染コンピュータを外部から指示するまま動くようにする代物で、その操られるままのPCをゾンビという。ファイルのみならずシステム領域にも感染する、いわゆる複合感染型ウイルスは、除去が極めて難しい。記憶デバイスのシステム領域まで入り込んだウイルスは、接続機器とのデータのやり取りまでも支配する。“パーソナル”なコンピュータの遠隔操作システムは、『コンピュータ・システムやソフトの遠隔管理サービス』という名目で、多くはユーザーの意志にかかわらず“導入”され“普及”させられてきたものだ。今日のPCユーザーは、それを悪用する魔の手から常に身を守らねばならなくなっている。

「室長、穴をふさいで、出方を待ちますか？」

飛田が立ち上がって尋ねた。

「まずは“戸締り”か。それでネズミが出なくなれば、儲

けモノだ。あとはシステム内の害虫駆除だけ、ということになる。」

外からの侵入をシャットアウトしても、内部に原因がある場合は、破壊と修復のイタチゴッコになるだろうが、それでも容疑者は絞れる。

ディスプレイに新たな文字列が現れ、変換された音声のひとつの提案をした。

『所員全員の端末に“のぞき窓”を貼りたいと思います。システム全体にストレスがかかるようwebからプレッシャーをかけてください。お願いします。』

室長が驚いて問い返す。

「万々が一にも、システムダウンを起こしたら、衛星の通信や軌道制御はどうなるんだ？」

これまで多賀根島から打ち上げた通信複合衛星はそのセンターで監視、制御しているのだ。日本は自前の衛星と米国などの衛星と同調し、常に調整を行っている。現代の世界では時間さえも人工衛星が決めていると言って良い。国際民間航空機構ICAOは、地上からの管制・誘導を大幅に縮小して、衛星からの直接誘導への切り替えを進めている。もし衛星間のネットワークが混乱すればGPSが正常作動しなくなり、地上交通から航空管制まで大混乱にな

る。各地で大参事を招きかねない。
『大丈夫です。それら観測・運用システムは研究用とは別系統で全国ネットで支えています。バックアップ・システムもあります。ですからターゲットはあくまで研究センターのネットサーバーで。』
第一アブローチの方針が決まった。

Scene 5 混乱

翌朝、混乱が始まった。

いつも通り、自分で作った弁当をかかえて早めに出勤した番場は、誰よりも早く異変に気付いた。所内通信は表示されたが、eメールの受発信ができず、そもそもインターネットにも接続できないのだ。

このセンターではメールのトラブルがしばしば発生する。それは、このセンターの受発信する情報量が時として膨大な容量になることと、そもそもメールを外部の業者サーバーに依存していることにも起因している。このセンターでは経費削減と管理合理化のためメールサーバーは置かず、大手プロバイダーが提供する無料webメールを取り込むようになっていた。従って外部とのやり取りだけでなく、通常のJASPA他施設や内部の所員との相互通信も、基

本的には外部サーバー経由で行われている。手間がかかる迷惑メールやウイルスへの対処をプロバイダーにゆだね、本来業務に関わるコンピュータとは切り離しておける、という利点もある。だが、およそすべての事務手続きをメールサーバー経由で授受するシステムの場合、組織内の意思伝達が外部状況で断ち切られるデメリットは小さくない。とりわけ広大な敷地に散らばった研究施設を統括している場合、生じる支障は無視できない。また、秘密の保持を要するようなデータのやりとりは危険この上ない。それでも経費削減の圧力は容赦なく、とくに秘すべき内容の場合は暗号化して添付ファイルにすればよい、と机上で裁断が下った。ちなみに、所内通信は内部サーバーで管理されているため、“お達し”は掲示されるが、所詮閉鎖的な、一方通行である。

以前にも一度、外部からの違法なアクセス集中でシステムダウンがおきたことがあった。その頃はセンターのホームページもメインシステムと同じ所内サーバー上にあり、狙われやすかったともいえる。今回は、所内LANでのつながりは生きているが、インターネットとのリンクは遮断されてしまった。多賀根島センターはwebの情報世界から切り離された“孤島”になってしまったのだ。

た。

浅井に番場からの電話が入ったのは9時半をまわったころだった。インターネットが繋がらないが、そっちの状況はどうか、という

「立ち上げるとパスワードがとおらないんだ。リジエクトして、勝手に再立ち上げしやがる。もう1時間近くもネットに接続できないんだ。所内のメールも通らないし。こりやちよつとフツージャやないよな。」番場がぼやく。

「あたりまえのように、情報室からのメールはないよな・・・」浅井が言う。

「本部棟に行く用事があるから、ついでに情報センターに寄つて来るワ」
そう言うって番場は電話を切った。

「竹田さん、何とかしてください」

情報センターの管理室から低い女の声が出た。声の主は足立だったが、番場は始めての遭遇だ。

「会計処理の締め切りが迫ってるんです！！インターネットはどうでもいいから、所内のネットワークだけでも早く復活してください！！ 仕事ができないんです！！」
中をのぞき込むと、ひつつめ・眼鏡の女が、怒鳴って

竹田と呼ばれた小太りの男は、センターの副長である。副長とは言っても彼の下には、昨夏ようやく情報処理の2級をとったばかりの女性が一人いるだけだ。センター長はウェブマスターを兼ねるポストだが本省からの天下りで、自分で使うPCのバックアップさえできないカタチだけの「長」である

「あ、いや、ボクもいろいろシステムリカバーをトライしてるんですが、実はこのアーキテクチャもまだ十分理解できてなくて・・・」

JASPAは3つの財団の合併以降、実験施設の統廃合を繰り返してきた。ここに赴任して3年目の竹田には、到底その継ぎはぎシステムを細部まで把握することなどできない。彼は穏和で能力もあるのだが、この分野の技術者にありがちな、コミュニケーション下手で、時として不遜とも思える対応をする。初心者がパソコンやインターネットについて質問しても、専門用語の羅列が返ってくるだけ、と評判が良くない。もともとコンピュータ関連のほとんどの単語は、言語の発音も無視して躊躇なく外国語を飲み込む日本のカタカナ文化が、我が物のように表記している。専門家とのやり取りには「専門用語辞典」が必要になるほ

どだ。

そんな彼が今は足立の勢いに押されて、すっかり動転し、言い訳だけを垂れ流している。

「明け方からもうWAN経由でアクセスが集中して、なんかファイアウォールを破ってハックしようとした形跡もあつて・・・んで・・・ルーターのガードが働いたんだけど、・・・んで・・・なぜかサブドメのデータ処理サービス部分がオーバーロードになって、・・・んで・・・メールはウェブなんでサーバーは外なんだけど、プロキシがダウンしたからLANからネットに繋がらなくて・・・」

要はインターネットが繋がらないと、これまで一般事務連絡に使っていたeメール交換もできない、ということをお願いしたいらしい。

「そんな英語の羅列はやめてください、わかりませんっ！サーバーとかがだめでも、事務のファイルならバックアップがあるでしょう？そこからコピーをください！」と、大声で足立が遮る。

「これ竹田さんのパソコンですか？」

眼鏡の奥で目が光り、右手がフルタワーのPCを指さした。

「あ、ああ。そうですが。。。」

気おされて頷いた。

「じゃあ、これに経理の書式1から8までを入れてください」

足立が、ひと昔前に流行った「にぎりずし型」USBメモリーをソケットに突き刺す。

「ひやああつ、やめてください、そんなモノ。。。。」悲鳴にも似た哀願の声が部屋をよぎる。ろくに検査もしていないような記録メディアは、ウィルスの強力な運び屋なのだ。そんな危惧を尻目に彼女は、自動立ち上げウィルスチェックでもEscanを連打してスキップし、自分のメモリーを表示させた。

「このホルダー！このホルダーにいられておいてください！だめなら、今月の立て替え処理はなし。竹田さんの筑波出張の旅費も出ません！！！」

竹田はか細い声で返事を伺う。

「もう、ちよつと待ってもらえ・・・」

「ライト・なうっ！！」

足立はPCを指さしながらそう言い捨てて部屋を去った。USBメモリーは瞬きもせず、密かに何かをPCにロードした。

番場は何も言えずに、情報センターをあとにした。

あすの所内通信には、混乱のお詫びが載るだろう。

ちよつとしたオマケ付きの。

Scene 6 監視

モニターの前で苦笑いしている主任の肩を室長が軽く叩く。

「またQueenがなにか、やらかしてくれたのかな」

「変換しますか？」

「頼む」

音声モニターから、例の女性風合成音声が流れてきた。

『本日15時18分、メインシステムにキーロガーとリモートサンプラーを設置しました。』

キーロガーとは、PCに入り込んでそこで打ち込まれたキーを全て記録するものだ。この記録を外部に吐き出すような機能と組み合わせれば、パスワードやメールを容赦なく流出させるウィルスになる。

『順次キーロガーは感染を開始します。メールについては、まず外部サーバーからのダウンロードをランダムに阻害します。旧アドレスの利用者は内部サーバー経由でメール通信するものと思われまます。』

室長も苦笑した。

「Queenがどんな風にキーロガーをぶち込んだか、容

易に想像できるね。」

「少々、強引すぎませんか？」

主任も苦笑したままだ。

「全員くまなく、速やかに監視を始めるには、こうでもするしかないだろう、今でもね。」

コンピュータとネットワークの急激な進歩と普及は、また、これを妨害したり悪用する技術をも飛躍的に向上させた。優れたハッカーならPCの前に座ったままで、おおよそあらゆる情報を入力し、また電子制御機器を捜査することができ。かつて世界に跋扈した特務機関のエージェントのように、命を危険にさらすことはない。だが、ネットワークに載らない情報は集めようがない。人間そのものは電子機器ではないからだ。米国が情報戦の勝利を謳うアルカイダ幹部殺害作戦も、現地調査との周到な下準備、なによりそこに至った、かの悪名高き「アブグレイブ収容所」からの情報なしには成功しなかつたろうといわれている。標的に人の手が触れない軍事作戦には、イラクでの結婚式誤爆のような失敗のリスクが必ず高率で伴ってくる。現場に強い優秀なエージェントは、まだまだ失業しそうにない。「あらゆる操作の記録がざつと200人分！ 何日分のデータが来るのか考えると、ぞつとしますね」飛田がウンザ

リしたように言う。
「まあ、まずはメールの出入りと付き合わせて、というところかな。エシユロン全盛の時代ならネット上のやりとりくらいは、おおよそ全て把握できたんだろうが。。。」

エシユロンは第二次大戦末期、英米同盟国が結んだ協定を出発点とする通信傍受システムである。1980年代に軍事研究部門が切り離されてインターネットとして発展した後は、世界中のeメールを監視できるシステムへと進化した。もともとインターネットは電話網の破壊に対抗する常設ネットワークとして米国国防総省の主導によって開発されたもので、軍事的側面が共存していることは否めない事実だ。国際テロ組織の監視を名目に、エシユロンのeメール監視行為は正当化された。英米豪加の英語圏の国々が中心となっていることに反発して、2000年代初頭、フランスは独自のネットワーク、ミニテルを構築して抵抗したが、世界の潮流には逆らえなかった。

「今どき、暗号化なしの平文で秘密事項をやりとりする人間なんて居ませんからね・・・」

暗号化技術の進歩は目覚ましい。今や第3者が機密通信を盗み見るのは至難の業だ。

『統計解析ソフトにあやしいログがあります。Cです。他の研究員がほとんど使っていない時系列の解析とモデル構築のソフトです。しかも解析結果を他の研究者とシェアした形跡がありません。』

主任が、あきれたように顔をしかめた。

「仲良し3人組、それぞれ勝手なこと、してくれませぬー」

Scene 7 D棟第3実験室

この日は朝から太陽が雲に覆われ、今にも雨が降りそうな空模様だった。海も灰色の空を写し、具合の悪い生き物のように、重苦しくうねって見えた。

番場は実験棟に向かっていた。浅井や茅原と連名で演題申請したのは固体燃料の推力制御についての新しい試みだ。その要旨を何とかまとめるために、補足データの処理を今日、明日中にも終えたい。来週には次期計画に向けた実験環境の整備に取りかからなくてはならない。生来暢気な彼も、多少の焦りを感じていた。

浅井の居るD棟に並んで2つの実験棟がある。ともにこれまで主に固体燃料ロケットの実験が行われてきた建家で、海に近い東側の大きな棟の正面40m程のところにはエン

「まあ、どんな暗号だつて開発者は“仕掛け”が分かっているし、おおよそどんなパスワードでも管理者は居るしな。見えないような仕組みは、管理者や開発者に見えるようにも変えられる。要はすべて一定レベルでの信頼関係で成り立ってる、ということだ」

コンピュータとネットワークの世界は20世紀、常に米国主導で進んできた。世界のPCの90%近くが米国のOSで動いている。2011年東日本大震災の被災者情報は、おおよそPCとインターネットに関する限り、すべて米国の手で集約された。日本の政府や諸機関が、自国の法律によって個人情報に手が出せないのを尻目に、米国企業が“契約”に則って動き、集約したのである。考えようによつては、米国はもはやエシユロンのような機関を要しないのかも知れない。

モニターにQからのレポートが入り、音声変換された。『Bのウェブノートは携帯ネットワークで“デザリング”しています。問題は彼のデスクにルール違反の無線ルータが設置されていることです。周囲に分らないよう出力を極力落としているようですが、プロテクトはとても万全とは言えません。ツイットもそこからしています。』
画面がスクロールされて、レポートが続けられた。

ジンのテストサイトがある。これまで優に500回以上の出力試験が行われた。実際のロケット発射台はさらにその150mほど先である。D棟に近い西側の小さい棟は戸之浦研究所の施設を大部分こちらに移植した時のもので、かなり古い。その“引越”以降、わが国宇宙科学の中核にあつた戸之浦は観測所となり、今は観測ロケット程度の打ち上げしか行っていない。打ち上げと研究開発の最前線は多賀根島になったのだ。大型ロケットエンジンの中心は水素系となり、LNG系などともに液体燃料系エンジンの研究開発は、北エリアで進められている。固体燃料の大型エンジンは補助ロケットBBの完成以降、開発予定がない。

番場は旧い方の実験棟Eの入り口に立ち、IDカードで開錠した。中は80平米ほどの、ガレージのような部屋だ。天井だけは小学校の体育館なみに2階分の高さがあるが、工学系の機器が並ぶ実験室としてはかなり手狭だ。立ち並ぶ機器は稼働しているのか否か定かでなく、その佇まいからは最先端科学の迫力が感じられない。

それら生気の乏しい機器の間を、ゆっくり移動する人影があつた。

「あれ、なにやってんの、こんなとこで？」と番場が声をあげた。

「廃棄処分のための固定資産の整理です。」低い声で足立が答える。タブレットに映ったリストをチェックする手を休めず、番場にはまったく目もくれない。

「この辺のなんだか分からないのは、みんな廃棄ですよね・・・」

部屋の一面がパーティションに区切られ、ホコリをかぶった大きな構造物が積まれている。1辺1・5mほどの方形のフレームに、膜が張られて折り重なっているもの、中心部をくりぬかれた直径50cmほどの円盤がビス止めされた鉄のアンクル、折り畳み傘のような骨組みがついた金属の箱、各角にコネクタがついた重そうな三角の鉄板、いくつもの四角い計器モジュール、赤、白、黒、青、黄色、緑・・・、色とりどりのコード類、そしてちよつと古そうな、ラックマウント型のコンピュータ。

「おいおい、何言ってくれんの、これは僕らの財産だよ、文化遺産といってもいい。もちろん、現役で働いているモノだってある。」

女の両の眉が眼鏡の上で露骨にゆがんだ。

「これのどこが文化遺産なんですか？ほこりかぶっちゃってるし、そこは錆びちゃってるし」

少しドスの利いた低い声に気おされながら番場は

「あのね、錆びてるとかじゃなくて・・・、ほら、きみもハヤブサは知ってるでしょ？」と言い返した。

足立の目が怪訝な色を浮かべるが、番場はお構いなしに続ける。

「小惑星の“いとかわ”に行って、世界で始めて小惑星物質を持って帰ってきた奇跡の宇宙探査船！」そう語る番場の目は宇宙少年の眼になっていた。開くばかりの温度差に辟易した風の足立は、

「これ何が入ってるんですか？ 嚴重に・・・」と傍らの金庫のようなロッカーを指さす。

「あつそれは、ま、もう入ってないとおもうけど、火工品とか・・・」

「加工品？」

「火薬のことだよ。ハヤブサがいとかわに金属弾を打ち出した時のやつ。」

足立が向き直った。「危ないじゃないですか！」

「大丈夫、規制量以下だし、雷管がなけりや爆発しないし・・・」

「火薬なんかあっていいんですか！」

「もっと大量の火薬は、この丘の地下にあるよ。そっちはロケット燃料用だけだね。」

固体燃料は基本的に火薬の類で、多賀根島にはその加工工場がある。火薬を何トンも詰め込んだロケットの完成品は、わが国の法律上、居住区域を運搬することができないからである。火薬といってもゴム状に加工しており、容易に爆発するような代物ではない。しかし酸素を必要とせず

に反応が進む物質のため、いったん“燃え”はじめると消火は容易ではない。そのため通常は実験用の最少量を「火薬庫」に格納するとどめ、防火・防犯のための保安責任を負っている。

「ぼくらはM系ロケットという、世界最高の固体燃料ロケットを作った東都大学の遺産を大切にすべきなんだよ。今度の“もやい”プロジェクトはそれが活かせる最高のチャンスなんだ」

我が国の宇宙開発には大きく2つの系譜がある。一つは鉛筆ほどのロケット実験から始まり、日本初の人工衛星を打ち上げた東都大学宇宙研究所、もう一つは科学技術庁や気象庁など役所を核として宇宙技術開発を担ってきた宇宙計画事業団である。前者は固体燃料型の中・小型ロケットで低軌道の観測衛星による科学研究を、後者は液体水素＋液体酸素による大型ロケットで静止衛星までを準備範囲にして実用技術を、それぞれ推進してきた。それらが200

3年、航空機開発の実績をもつ航空宇宙研究センターを含めて3者で一体化したのである。当然のように生じた軋轢のゆえにお役所の支配が強まり、打ち上げ失敗が続いた時期もあった。

「こんなガラクタに、そんな価値があるんですか、そっちの壊れたテントみたいのとか・・・」

足立の反論がますます番場の“宇宙愛”に火をつけた。「失礼だな君は！こっちのガラ・・・、いや装置だって、太陽電池パドルを展開する動作モデルで、その奥のは今を時めく“宇宙帆船”の帆を遠心力で展開するモデルなんだ。」

熱弁が続く。

「そのちよつと古そうなコンピュータ、実はまだネットワークに繋がってる現役なんだ。ミウラ折りって知ってるかな。大きな地図も一気に広げたり、たたんだりできる折り方。そんな作りの帆が宇宙で開くなんて、すてきでしょ？そういうのの制御プログラムとか、難しい固体燃料エンジンの燃焼制御のデータや制御モデルも入ってる。」

足立はつまらなそうに

「そんなの、新しいコンピュータに移しちゃえばいいじゃないですか」

「そんな簡単なことじゃないんだ。いろんなセンサーとの出入力の規格とか、記録媒体の問題とか。これでも2世代前のコンピュータからようやく移したものだから。」
年代物のLunixサーバーだ。2009年にMiracle社に吸収される前のMicro社のミニコンにまで遡って、固体燃料ロケットの開発の歴史が移植されている。

「OSだって変わるし、会社だって潰れたり合併したり・・・・」

番場の熱弁が少し言い訳がましくなってきた時だった。戸外で甲高い電子音が響いた。防犯ベルだ。

「なんだ、こんな昼間っから・・・」

しかしベルは10秒足らずで止んだ。

「もーっ、人騒がせだな。。。」

番場がそう言い終わる間もなく、次は警告アナウンスが流れた。

「ロケットエンジンの燃焼試験を行います。実験エリアGにいる方は直ちに観測棟内に退避して下さい。繰り返します・・・」

「おい、なに言ってるんだよ。そんな実験、聞いてないぞ。」あきらかな狼狽を顔に浮かべた番場の目が実験場の

方角にある天窓を見上げる。

「点火10秒前・・9秒前・・8秒前・・・」

7秒前で、アナウンスが途切れた。二人は顔を見合わせ、押し黙ったまま6秒を数えた。
なにも起こらなかった。

「なんだよ、また誤報かよ。一体この警報システムはどうなっちゃったんだ？」そう言ってる番場はふと、不安にかられた。「昨日からの情報システムの混乱で、全部がおかしくなっちゃったんじゃないの？」

足立の方に向き直って

「これって、みんな、どこからの攻撃かな・・・」

と、そう言ってみたものの、「攻撃」という単語に少し子供じみたニュアンスを感じて、語尾が窄んだ。案の定、足立の反応は素っ気なかった。

「まっさか。SFマンガの読み過ぎですよ。」

可愛くない。語感にまるで優しさが無い。「同じ年くらいだけど、マリリンちゃんとはえらい違いだ。」そう思いながら、ふとみると足立の頬にもふたつ、ほくろがある。

「まったく！どっか似てるかな、と思ったけど、まるで月とスッポン、ブタと真珠だね」

足立が耳ざとく聞きとがめ、キツとなって向き直る。

「はあ？誰がブタでスッポンですか？ だいたい合ってるし、それ！」

足立が腹を立てたから、ではないだろうが、その夕刻には情報処理室から、第3実験室サーバーのネットワークからの切り離しと、サブドメインの廃止が勧告された。必然的に、ネットワーク上で呼び出して使っていた自作の統計処理プログラムや、モデル計算で用いたデータや係数も、再チェックして現行システム内に移植することになった。

Scene 8 特許戦争

飛田の見つめるディスプレイに、浅井や番場たちの通信内容が映し出されている。そこからは、彼らが次の国際会議で、何をどこまでを公表するか、迷っていることが読みとれた。

独立行政法人となったJASPAは常に“企業努力”も求められている。国の号令で後押しされる産官学の共同研究では、具体的成果の還元が強く求められ、その最たるものが新技術開発による特許の取得であるといっただろう。

宇宙ビジネスの国際競争は苛烈だ。宇宙産業の世界市場

の規模は2008年に15兆円を越えた。衛星打ち上げひとつで数百億円から千億円単位の商談になる。当然、売り込みも、先進技術の特許争いも熾烈になる。毎年、あるいは隔年で開かれる航空・宇宙関連の国際会議は、各国間の学術的な議論ばかりでなく、先進の技術や知見を競い合う場にもなっている。しかし新しいアイデアや最新データの公表は、時として慎重を期さねばならない。大事な知的所有権が侵されるおそれがあるからだ。国策としての取り組みが貧弱で、文系・理系間の距離がある日本では、技術者の意識が低さと法律家の勉強不足のため、しばしば適正な権利が脅かされることになる。

飛田が若いアナリストを伴って室長に、通信状況の解析結果を伝えた。

「浅井、番場、茅原、いずれもサーバーに勤務時間外のアクセスがありました。中には明らかに私用と思われるモノもあります。」

「例えば？」

室長の方に、若いアナリストが答えた。

「茅原の場合は、ネットで株取引を行っていて、株価の時系列解析や構造解析にサーバーの統計ソフトを用いている

ようです。」

「明らかな社内ルール違反だな。彼が特許を扱っていることに問題はないのか」

「自社のパテントですから、インサイダーになりますが、今のところ目立った自社株の売買はありません。」今度は飛田が答えた。

「浅井、番場は？」

「所内サーバーで直接、何か私的なことをしている形跡はありません。」

「昨日、Qが番場と居たときに、警報が鳴ったそうだが、こちらからの操作か？」

「いえ、それはありません。」

室長が一呼吸、思案を巡らした。

「我々からの捜査に、なにか反応したのか。。。例えば、センターのシステムに食い込んでいるネズミたちが、自分たちの支配はまだ有効か、確認した。。。。」

「誰がどういう経路で入り込んだか・・・いつそのこと所員だけでもログインごとに、本人確認できればいいんですけどね」と飛田がいうと室長は

「アクセスルールの変更か。。。。」と、何か思いを巡らせた。

「ルール変更は、こちらでできることじゃないですよね。」というアナリストの言葉に、室長が「ふっ」と小さく笑った。

「ちようどいい人材が赴任したばかりだそうじゃないか、お偉い方で・・・」

「調査役のことですか。」

「ここでちよつと、ひと働き、してもらおうじゃないか」

Scene 6 調査役

朝9時45分、コーヒーマグを片手に、調査役はデスクに着いた。30平米ほどの一部屋をパーティションで区切って、上席研究員とシェアしているのが、少々不満ではある。おもむろにパソコンを立ち上げると、おそらくは誰も真剣に読むことはないだろう次期開発計画の作文を、一語一語ゆつくりと打ち始めた。

電話が鳴ったのは、自分でも気に入っている「開発のもたらす効果」の項の「特許申請の倍増」を見直している時だった。情報処理室の竹田だった。

「調査役、まことにお伺いしにくいのですが。。。。」

「なんだね。率直に言ってくれたまえ」

「昨日の6時頃、お部屋にいらつしやいましたか？」

「ああ、もちろんだ。わたしは5時20分の退勤時間が来ても、すぐに帰れる立場じゃない。それがなにか？」

「まだログを精査しないと分からないので、あくまで可能性なのですが・・・。」少し口ごもって「実は監視モニターデータには昨日の6時過ぎ、調査役のPCが海外のエロサイト、いや接続制限サイトにアクセスしたという警告データがありました・・・。」

調査役はほんの一時、口を開けて無言になり、次の瞬間立ち上がって叫んだ。

「ば、ばかにするな、そんなもの・・・わざわざこんなところから見るか！！」

そして自分は4時半にはとつくに退社していた、と臆面もなく付け加えた。

この“事件”によって、一度は各所に購入しながらも、面倒だからと導入が見送られた指紋認証システムが、各PCと各棟の入り口にも一斉に配備されることになった。明日の所内報には指紋登録についての案内が出るだろう。これでセンターへの立ち入りだけでなく、ネットワークへのアクセスにも、確かな“本人確認”が必須となった。

Scene 10 メイプル・ナッツ

わずかひと月足らず前のことなのに、この島を去ったのがずいぶん昔のように思えた。

今回の来島の目的は、次期研究計画の打ち合わせに加え、多賀根島センター・サーバーのリモート利用に指紋認証が必要となったためだ。センター入所にも指紋登録が必要だ。こうした場合は通常、発行機関に本人が出向いてその機関機器で画像登録を行う。なりすましの他人が指紋登録したら大変なことになるからだ。しかし会社からは、今さら指紋認証の登録くらい「出頭」せずにできないのか、と聞かれた。JASPAの研究所ならどこでもできるだろう。条件を揃えた標準的な読みとり機を用い、指紋の画像データを暗号化して送れば、登録できるはずだというのは、あながち見当違いでもない。指紋の“山”が連なる方向を検出・合成・解析し、いくつかの特徴点を捉えて本人を確認する。指紋鑑定の要となる特徴点を5、6個確認すれば、まづ同一人物かの判定に困ることはない。10個も取れば犯罪捜査でも確たる証拠となる。これがオーソドックスな指紋認証だ。

そもそも茅原が日々携帯しているノートPCは、三つ星エレテックがJASPAからのリクエストで守秘機能を強

化したプレミアだ。もともと指紋認証システムが装備され、昨年時点で最も解像度の高いラインスキャナが付いている。それをPCの立ち上げ時だけでなく、JASPAネットへのリンク時にも作動させろ、というわけだ。よほどのことがあったのだろう、と三つ星側は思った。それでなんとか出張は認められた。当のセンターで登録すれば面倒がない。だが実はなにより、茅原本人が島に来たかったのだ。多賀根島の空港は島のほぼ中央部にある。周辺には殆ど何も無い。宇宙センターまでの直通バスなどなく、鹿児島からのフェリーが着く西前市か、もっと寂しい中多根町で本数の少ないバスに乗り換える必要がある。

携帯が鳴った。

「ああ、おれ。今着いた。一番東側の出口で待ってるよ。悪いな。」

番場からだった。車で迎えに来てくれる、というのだ。いいヤツだ。本当にすまない、と茅原は思った。そこにメールが届いた。「ヤン」とあった。

茅原は三つ星重工の社員として、プロジェクトごとに外向してくる。センターの連中は気心の知れた研究仲間だが、立場の違いが意見や行動の違いを生むこともある。セ

ンター職員は研究に関することなら比較的自由に行動できるが、茅原は計画外のことは逐一本社に可否を問わねばならない。

センターについて昼食の後、まず今回の失敗を踏まえ、計画全体の再確認と次期計画の要点とを議論した。それに加えて民間会社の立場としては、目下、国際学会向けに取りまわっている可変ノズルと新素材について、特許の話も詰めておきたいと思った。しかし浅井らは学術的な貢献に気持ちは向いていて、あまり特許には興味がない。会議はコーヒープレイクを挟み、4時間近くかかった。

会議を終え、茅原は管理部に駆け込み、指紋登録の手続きに入った。もう夕刻である。

「おー、先に始めちゃったぞ」

浅井が手を振った。今夜も平日の夜。飛遊石の店内はすいていた。ソファには番場とマリリンと、もう一人の女性が座っていた。

「おひ・さし・ぶり・です」

その女が立って会釈した。茅原は笑顔を返し、どうも登録手続きに手間取って、と皆に言い訳しながら重い木製ドアを閉めた。ドアベルがチリンと鳴った。

「戻ってきたのよ、ヤンちゃんが」

茅原のカバンを受け取ってマリリンに渡したママが、少し複雑な笑みを浮かべて、そう告げた。二人が席に着くなり、

「ママ、わたし来る、迷惑か？」ヤンが、刻み込んだようにくつきりした二重瞼の目で見つめながら、ママに聞いた。

「わたしと曜日、分けましようか？ママ」

席に戻ってきたマリリンが屈託なく笑って提案した。

「それ、いいね、あんたアタマいいね。」とヤンが言う。

ママが複雑な表情でマリリンを見たが、彼女は笑みを返して頷いた。

ヤンは2月の打ち上げ失敗の後、間もなく国に帰る、と行って店を止めた。店に顔を出す、と連絡があったのは昨日のハナシだった。

「なに飲んでるの」と茅原が聞く。

「コレ、お土産の、カナダのウイスキー。」

皆、丸みを帯びたタンブラーで、ロックを飲んでいる。テーブルの上のずんぐりしたボトルはシーグラム社のクラウンローヤル・16番キヤスク。ボトルングからも何年も経つ。ちよつとした貴重品だろう。

「モントリオールに行ってたんだって」番場が説明すると、「あ、そう。何年前か前、学会で行ったな。ICAOがある街だよな。」茅原が受けた。

「こつちも食べてね。メープル・カシューナッツよ」マリリンが勧める。

「ウイスキーに甘いナッツ??」と怪訝そうに茅原が言う

と「意外に合うんだな、これが。。。」浅井はグイとグラスを干した。

「今夜のおすすめだよ。」ヤンが茅原の脇に体を寄せて座り直す。

ナッツをつまんだ指には溶けたシロップがからみつく。カットの無いタンブラーは、みるみる指紋だらけになった。

ナッツがなくなつたところでヤンが、

「はい、今日のサービスはここまでネ。あとはいつものボトルねー」

ウイスキーとグラスを片づけ始めた。

「あたしがやります」

マリリンが言う

「アンタは浅井さんたちの、いつものボトルとグラス、セツトしてね」

ヤンはグラスを下げに行つて、しばらく戻つてこなかった。

「ハイ、これもおみやげ!!」

戻つてきたヤンは小箱を配った。

「わあ、メイプル・シナモンティー。」マリリンが喜ぶ。

「あたし大好き!」

「さっきのお礼だよ」とヤンが言う。

「わたしも何かお礼しなくちゃ。」

今度はマリリンが奥に消えた。10分近くが経ち、ヤンが怪訝そうに席を立ちかけた時、

「ごめんねヤンちゃん、こんなものしかなくて。」

小さな袋を手にマリリンが戻つてきた。「まだ使つてないのよ、夏用に買ったんだけど。」

「洒落てるね。それ京扇子でしょ。」番場が割り込んできた。

「キョウセンス?」

「京都のお扇子、調べてご覧よ」

番場に促されてヤンが極薄型のタブレット・フォンを取り出した。フチドリがデコだ。

「きや、カワイーそのケイタイ。ちよつと見せて」

「いいでしょ、バンバさんとお揃いな。お店のカラオケと

も通信できる!バンバさんのおかげナ」

ヤンの目線に番場が一瞬、照れた。マリリンもスマホを取り出したが、古くてごつい。

「あたしのメアド、通信するから入れてね!」

マリリンとヤンのメアド交換は、少々手間取った。

茅原はそんな光景を横目に、浅井と“場外会議”で上司たちの採点をしていた。

時計が10時をまわった頃には、茅原はかなり酔つていた。マリリンの勧め上手か、それとも最初の『駆けつけ3杯』が効いたのかは分からない。ママが珍しい、というほどトイレに行く足取りもおぼつかなかった。ヤンが「ダイジョウブか?」と心配そうに眼をのぞき込む。

「大丈夫・・・行こう」

「行こう?」番場が聞きとがめる。

「い、いや、もつと、とんどん行こう、飲もう、つて。。。」

「ごめんなさい、わたし勧め過ぎちゃった。。。」「マリリンが言う。「わたし、ホテルまで送つてきます」

マリリンを見るヤンと番場とママの眼に力が入った。

「だめっ!」と番場、「そりやダメよ」とママ、「ソダ

ヨ」とヤン、

「どこ泊まるか覚えてるか?」と浅井。

「中多根のホテル・サンクス」るれつのであやしい茅原の答えに、ママがすかさず、

「空港に近いビジネスホテルね。モーニングコールならしであげるわよ。」

「もーうっ、お前、今夜おれんちに泊まれ。あす朝、送つてやるから」番場が言った。

「でも、ホテルの方がいい、きつと、ぐつすり休めるネ」とヤンはその案に反対する。

いつも口数が少ないバーテンが、言った。

「あそこ、ぐつすりなんて寝られないヨ。下のコンビニ、暴走族のたまり場!」

結局、茅原は一晚、番場の世話になった。

Scene 11 クローン

ESAB本部長はログの解析に追われながら、“要注意人物”A, B, Cの3人がスナックで会合するまでを追尾していた。

夜、9時をまわった頃、モニターのコールがQからのデ

ータ着信を知らせた。別のディスプレイの前で他の案件を扱っていた飛田主任が、椅子をスライドさせて受診データを確認すると、それは画像データだった。

画面に展開すると、それはキーボードを外したノートPC内部の画像だ。

『緊急依頼：CPUからメモリーまでの型式と本機種での使用年代チェック。疑い：クローンPC』

画像を解析室に廻し、急遽、室長にコンタクトした。

「どういうことでしょうか?」

『電話のモニターに映った室長は、下くちびるを少し噛んで数秒間、無言だった。』

「わざわざクローンまで作る意味は何だ・・・」

世の中に、機能も記録内容も全く同じ2つのPCがあったらどうなるか。2000年代の初頭、クローン・ケイタイなるものが世界的に問題となった。個々の電話番号を決めるICカードをコピーして、他人の番号を乗っ取ったのだ。電話もメールも使い放題に使い、料金だけが真のユーザーに請求された。同時刻に同じ番号が使われない限り、その存在はバレなかった。それ以外にも不正使用機を見破るノウハウがある、と電話会社が主張したが、方法は明らかにされなかった。もし見破る根拠が利用者の位置情報追

跡データだとしたら、プライバシーの侵害を問われかねなかったからだろう。

「通話機能のタダノリくらいなら被害は知れてるが、PCまじりのコピーとなると、かなり厄介だな。もしそれに強固な漏洩ウィルスが遺伝子のように組み込まれていたら、と思うとゾッとする。。。」

解析室からの返答があった。三つ星系では扱っていない型のDRAM、回路が異なるCPU周り・・・などからまず三つ星エレテック社製ではない、という結論だった。おそらく外見はもちろん、すべてのアプリケーションやファイルは吸い出されて移植されているだろう。

不正クローンの使用目的は、権利の盗用と、それに基づく“なりすまし”である。クレジットカードや預貯金に関する情報をパスワードとともに”記憶”させたPCの情報が丸ごとコピーされたのであれば、被害のスペクトルは甚大な範囲におよぶ。だが、その程度の盗用目的ならば、ハード面まで完全コピーのクローンを作るほどの必要はない。飛田が推測する。

「センターへの登録では、ハードのチェックはしてないでしょうね」

インターネット上で個々のPCを同定することはな

「では、すでにそこまで全ての記録を吸い出してあるのに、あえてクローンまで作る理由は何だ？」

「今度はいくら飛田が沈黙した。」

「本体でなにか操作する間、茅原や周囲に、盗まれた、ことを悟られないためじゃないでしょうか？」

「TVモニターの室長が目を閉じた。」

「本体での操作・・・本体でしかできないこと・・・ハード認識するようなネットへの接続・・・もしくは本体の環境でのみ作動するプログラム・・・か」

「ここまで“そっくりさん”が作られたということは、茅原が常に持ち歩いているというノートPCが、以前にも誰かの手に渡っていたと言うことですよね。」

「茅原は気付いていた、ということか。共犯なら、そこまで手の込んだことをしなくても・・・」

「社内の仕事は常にあるし、もしかすると2台で分けた方がよい仕事もあるかも知れませんか。まあ、共犯だったらの話ですが。」

「いくら似せても“まがい物”だ。ちよつと使えばオカシ

な困難だ。かつてPCの心臓部、CPUに通し番号が付された時代もあったが、廃止されて久しい。強いて言えば、搭載されたOSやハードディスクなどの通し番号を逐一参照して同定する方法がある。ただこの場合も、それらを交換すれば、他のPCが“なりすまし”ことは可能だ。

「直接、メインシステムには繋げないのだから、そこまで厳しくする必要はないだろう」と室長。「だが、三つ星の社内ネットワークではどうだろう？」

「三つ星の社内ネットワークなら可能性はありますが、もしハードやOSのシリアル番号まで書き換えるとなったら、ちよつとした国家プロジェクトですよ。」と飛田が答える。「むしろ、かぎりなく“見てくれ”と日常の“使い勝手”を似せただけのものかも知れませんか。」

多くのユーザーは、PCが自分のパスワードで立ち上がり、なじみの画面が現れて、よく使うソフトが動き、自分の記録が消えていなければ『いつものマイPC』だと信じて疑わない。

「だが、メールやネットの接続ができれば気付くだろう？」

「ボクみたいなものぐさは、この仕事に就く前ですが、すべてアプリの『パスワードを記録しますか?』に『YES』と分かるだろう。もし三つ星の社内ネットがハード認識なら、接続できない。」

飛田の返答は珍しく、少しだけ皮肉っぽかった。

「室長は高価なPCを、いつも恵まれた環境でお使いなんですよ。我が家で私用に使うパソコンなんて、しょっちゅう止まるわ、繋がらないわ、ですよ。“まがい物”でも、なんかそれらしいメッセージが出てくれば、ちよつとの間、納得してあきらめちゃいますよ、きつと。」

室長の小さなため息が聞こえた。

「そんなもんかな。」

「それでも所詮クローンはクローンですからね、本物通りには動かない。いざれボロがですよ。バレるまで、そう、もって1日、2日かな・・・」

所長がふと思いついた。

「茅原がそこでPCを使う状況を作れ、とQに伝えてくれ。動作の不調を見て、不審そうな様子を見せるかどうか。。。」

「室長、厳しいです。茅原はだいぶ酔ってしまったようです。Qはなにかを妨害するつもりじゃないかと思いません。」

Qから連絡が入ったのは30分後だった。茅原のノートPCには追尾するための素子は組み込んだが、新入り関係者を追尾するための“小道具”は捨てられてしまった、と。

Scene 12 夜叉

この島の梅雨入りは本州よりだいぶ早い。今年はまだ梅雨のはしりだろうか。茅原は今朝、そのどんよりした天気の中を鹿児島経由で帰路についていた。

浅井もびりつとしない昼の勤務を終え、夕刻すぎて出直した。

「どうも、斉藤さん、こんばんは」

ノックすると警備室の小窓から制服の男が顔を出した。

「浅井さん、また忘れ物、だね。今夜も長くかかるの？」

少し笑いながら通用口の扉を解錠した斉藤は、50代半ばながら、その体つきには衰えが感じられない。陸上自衛隊に所属していた島の出身者で、今でもその職歴を誇り、首から隊名を消したドッグ・タグ（認識票）を下げているという。

警備室の奥の時計は7時半を回っていた。もう一人は監視室でモニターを見ている。

「スンマセーン」

事は溜まってるってこと。」

警備室の面々とはつきあいが長い。忘れ物を取りに帰る、という嘘はとくにばれているが、然るべき暗黙のルールはお互いのためでもある。とくに斉藤は男気があって、仕事に打ち込む浅井に一目置いてくれている。

「で、君はなんで？」 浅井は聞き返した。

「私は請負派遣なんです。だから毎日、決まった分だけ仕事を仕上げないとダメなんです！」

見れば書類の山は、事務倉庫の文房具出納票だ。たしかに研究業務に関してはなんらの重要性もありそうにない。経理の見直しだろうか。聖域なきムダの削減を掲げる政府は、この失敗続きの研究所を目の敵にしているように思えた。

「大変だね・・・」

派遣にノー残業デーも関係ないな、とは思いつつも、「か月も経たない新人派遣に一人残業させるとは、と、なんとも不用心な管理体制には呆れる他ない。

「もうそこそこ遅いし、手伝おうか？」

「いえ、もうこれ一枚で終わりですから」

女は目の前で票一枚のデータを入れ終わると、よしつ、と言って立ち上がった。

出退勤管理のセンサーにIDをかざすことなく、浅井は構内に入った。ノー残業デーの水曜日はC棟もD棟も殆どの窓はすでに照明が落ちている。月のない暗闇の中で、24時間計測を続ける機器類とLANのLEDだけが緑や赤に点滅して、窓ガラスに映る。

D棟の玄関を入ったところで、ふと事務室に明かりが見えた気がした。

誰かいる。浅井は「所内のデータが漏れているか、操作されている」という番場の言葉を思い出した。

まさかとは思いつつ、事務室の扉の前に立って、息を殺した。確かに誰かいる。研究エリアでない事務室には電子錠はない。静かにノブを回し、ドアを押した。小さくチツと音がして、開いた隙間から座っている女の後姿が見えた。

足立だった。20cmほど積み上がった書類をわきに、ひとりごとを言いながらPCと格闘している。

「足立さん？なにやってるの？」

驚いたように小さく「あ」と叫んで、女が振り向く。

「浅井さん！ なんて浅井さんが？」

浅井はそこで、悪しき風習の「計画残業」と「サービス残業」について解説する羽目になった。

「つまり、今月の予定残業時間をオーバーしてるけど、仕

「ずいぶん、そのアプリに慣れたね」

「はい、おかげさまで」

足立は一緒にロビーに出ると、「失礼します」と言って棟を出た。浅井はほんの少しの間、その後姿を見送り、きびすを返して研究室に向かった。

3階の部屋に入ろうとした時だった。けたたましい警報ベルが鳴った。聞きなれない音だった。避難訓練の時に聞く電子音ではなく、発射実験の時のサイレンでもない。旧い火災報知ベルのような、明らかに警報と分かる音だ。隣の実験棟の方角だった。

浅井は1階に駆け下り、棟の裏口から渡り廊下に飛び出した。恐怖の予感がした。ベルは鳴り続けている。

3、40m先の薄明かりを素早くよぎる人影が見えた、ほんの数秒後、実験棟の方から叫び声が聞こえた。

「斉藤さんっ！ 斉藤さんっ！！ 大丈夫ですかっ！！」

足立の声だ。思考が真っ白に止まったまま、体だけが激しく動いて、声の方に向かった。

暗さに慣れた眼にとって非常灯は、惨状を照らし出すのに十分すぎるほど明るかった。網ガラスの入ったスチールドアと、コンクリートの叩きに飛び散っていたのは、まぎ

れもなく大量の血液だった。
座り込んだ男の上半身を抱きかかえるように、女が叫んでいた。

「大丈夫！絶対、助けますから」

男の両目は半分閉じられ、ほぼ意識を失っているように見えた。その頭を左手で少し左にかしげ、女の右手は少しはだけた男の制服襟元に差し込まれている。さらに走り寄ると、その手元がよく見えた。さほど力のありそうにない白い親指が、首もとで総頸動脈を押さえつけているのだった。

「どうした」と聞きたいが、息も上がっているが、なににより動転していて言葉が出てこない。険しい顔の足立が一瞬、こちらを向き直った。顔にも眼鏡にも血が飛んでいる。

「救急車を呼んで！！早く！！大量出血していると。血液型はA型！」

なぜ血液型まで？疑問は首元に見えた金属プレートで氷解した。名前と血液型を刻んだ誇りの証だ。とはいえ、こんなに出血したのでは助からない。そう思ったが、女は呼びかけ続けている。

「大丈夫！斉藤さん、絶対、助かりますから！大丈夫！！」

この力強さはなんなのだろう。この安心感を与える迫力は。この女のどこにこんな力が潜んでいたのか。そう思いつつ、浅井は少しふるえる指で119番を押した。

「それ、踏まないで！」

足立が叫んだ。浅井が足立たちに近寄ろうとしたときだった。

浅井は足元を見た。親指ほどの、白く頼りない物体が一片、落ちていた。

間もなく、もう一人の警備員が駆けつけた。15分ほどして医師を乗せたドクターカーが来た。

この町の救急車はほぼ新型である。万が一に備え、周辺対策の一環として定期的な町に贈られる。病院も離島にしては充実している。斉藤は素早い救命措置と大量の輸血で九死に一生を得た。心配された手足の麻痺もなくてすみそ
うだ。

浅井は足立とともに事情聴取のため中多根署に缶詰と
なって夜を明かした。翌々日も呼び出されたが、その日は足立とは会わなかった。浅井は帰り道、足立の言葉を思い出していた。「何を盗りに来たんだろう、こんなところに。素人かな、金目のものなんかあそこじゃないのに」そう、浅井がつぶやいた時、足立が断定した。

「これはプロ。斉藤さんは習志野卒のレンジャーだったの。」

改めて、背筋に冷たいものが走った。戦場とは違う、何か油断があったのかも知れない、不意を付かれたのかも知れない。とはいえ元自衛隊の精鋭、戦闘のプロだった男が、殺されかけたのだ。恐怖と疑問と、そしてそれに続く激しい怒りが浅井の体内に噴き出した。

足立はそれ以降、研究所には現れなかった。

Scene 1 03 指紋認証

昨夜の事件を受けて急遽、情報分析の会議が開かれた。出席者は室長、主任、副主任、データ分析の担当者2名の5名だ。

「ねらいは何だ。」室長が口火を切る。

「昨日から指紋認証による本人確認が強化されましたが、一昨日のクロールPCの件と関連があるのでは？」副主任が言う。

「関連はあるだろうが、単なるネットワーク侵入法の確認にしては、荒っぽいな。実際の所内侵入はリスクが大きすぎる。」室長が言う。「なにか早急に手に入れたいものか

あったんじゃないか」

「誤算もあったんじゃないでしょうか。潜入すれば警報システムもすべて解除できると思っていました。。。最新の警報網は確かに解除されていたし、始めての侵入じゃないかもしれないですね」と、飛田主任。

若手のアナリストが言う。

「来年の9月に国際航空宇宙学会の年会があります。その演題申込みの締め切りが来月です。そこでの発表内容に関連した特許の申請が進められているようです」

「特許申請はアイデアやデータを公開する前にしておく必要があるからな。」

室長が言うと、主任が推測を加える。

「侵入者のグループが同様のアイデアを特許申請しようとしていれば、妨害したいだろう」

女性のアナリストがそれを補足した。

「妨害だけでなく、もし申請に必要なデータがあるなら、それは横取りしたいでしょうね」

「最終書類の段階なら、データはいただき、書類のどこかに欠陥を作れば申請を遅らせられる。」主任が言うと、

「その欠陥も、元データから改ざんしたものならば、気付くのが大幅に遅くなる。」と室長。

皆、少しだけ謎を解くヒントが手に入った気がした。

「それにしても、指紋認証の件はオソマツだったな。指紋のプラスチック・コピーとは」

室長は少し呆れたような口振りだ。

「手口としてはもう7、8年前からあったものではよね」と、女性アナリストが思い出すように言った。2000年代の初頭、大陸の窃盗団が日本への入国の際、偽造パスポートとセットの“指紋”フィルムを指に付けて通関しようとした例がある。ただし何人が成功したのかは定かでない。

室長が再び、

「本人から正確に写し取ったものならともかくな。おそらくガラス面か何かに付いた指紋から再生したコピーフィルムだろう」というと、

「指紋跡から合成するという技術は新しいですね」今度は若い男のアナリストが競うように口を挟んだ。「今さら、指紋跡の隆線だけを合成して特徴点の認証を通過しようというのはムリがありますけどね。スキヤナの精度も各段に上がってますし。」皮膚紋理だけでなく汗腺孔まで正確に読み込めるようになり、指紋による認証システムも進化している、と彼は説明した。

「それでもまあ、静脈や瞳孔の認証じゃなかったから、あく見たんじやないでしょうか」

主任がそうまとめたとき、モニターが何かを受信した。音声に切り替えると、Qだった。

『Cが昨日帰京せず、鹿児島に留まっています。誰かを待っているのかもしれない。』

みな、色めきたった。

「クローンを交換するつもりじゃないか」

「彼は承知の上、ということですか？」主任が立ち上がった。

「現場で証拠を押さえるよう、Qに伝える。」室長の指示が飛んだ。

Scene 14 霧島6月

月光の中では白く浮かんで見えた雲が、ゆっくり漂ってひとたび月を覆うと、周囲を真の暗闇に変えた。両側の木々がトンネルのように山道を包む中を、2本のハログゲン・ビームが滑らかに左右に振れながら登ってくる。ガソリンエンジンなら排気量500cc以上は優にありそうな漆黒のスクーターが、タイヤの音だけをひそやかにききませて走っていく。ジレラやプジョーのモデルに似た、前輪2輪

の電動スクーターだ。

丘の上に4階建てのホテルが見えてきた。建物全体が山の斜面を覆うように作られ、全室に霧島高原を見渡せる大きなテラスがついている。例年の梅雨明け宣言まではあと2週間ちかくある。宿泊客も少ないのか、灯りがついた部屋はまばらだ。豪華な宿泊棟の西側に突き出たサービス棟は厨房などが入る、なんの変哲もない3階建てのビルである。もう11時になろうという時刻、サービス棟には人がない。山道を登ってきたスクーターはサービス棟の北西の角、搬入口の駐車スペースに停まった。ヘルメットを取ったライダーのシルエットは女だ。

スクーターのサイドカウルを開くと大型のモーターが見えた。その軸には、不釣り合いに大きなプーリーが着いている。そこに巻かれているシャープペンの芯ほどの太さのワイヤーの端には小さな金属ボールと、強化プラスチックで成形された滑車付きフックがセットされていた。女はリアボックスから取り出した射出機にフックをセットして3階屋上の手すりを狙った。ボツと小さな音がして飛び出したフックは、手すりの間を抜けて屋上に落ちた。女はワイヤーをたぐって手すりの下端にフックをかけ、巻きをゆるめておろした一端の小さな金属フックを、左手首に巻

いた皮の把持具にセットすると、右手のリモコンでモーターをスタートさせた。

雲間からわずかに月が覗き、辺りの闇を吹き散らすように照らし始めた。女の黒いシルエットが静かに屋上へ上っていった。

爪先でガラスをつつくような小さな音に気付いたのはヤンだった。警戒するように窓の外を見る。わずかに開いたカーテンの隙間から見えるのは、広い人工芝のテラスと、月明かりの下に広がる木々の海だ。ガラス窓には小さな甲虫がとまっている。その腹に、誰かが見つめるモニターに繋がったピンホールがあることなど、思いもよらない。

ヤンが振り返ると、茅原が頭をタオルで拭きながら、今夜2度目のシャワーを浴びて出てきたところだった。二人は眼で笑いを交わしながら、冷蔵庫を開けた。

茅原がスポーツドリンクのボトルを掴んで、キャップをねじった時だった。

ドンドンドン、入り口のドアが叩かれた。

「お客様、お客様、大丈夫ですか、お客様！」

二人は顔を見合わせ、意を決した茅原が走り寄り、チェーンをかけたままドアを開いた。

「空調室で火災が発生しました。鎮火はしましたが、まだ煙が出ています」顔半分を覗かせた女従業員が言う。
「なんともないが。。。」「茅原がそう言った時、ヤンの声が出た。
「なんか、クサイヨ」
見るとエアコンの吹き出し口からうっすらと煙が出ている。

「お開けください、早く、お開け下さい」
チェーンを外すと口をハンカチで押さえながら従業員服の女が飛び込んできた。
「ベランダに避難してください。大丈夫です。煙は間もなく収まります。とにかく一端、ベランダへ」

二人は押し出されるように、ベランダへ出た。白い煙が後を追うように、一気に部屋に充滿した。従業員の女はガラス越しに、大丈夫と手で合図して、煙の中に戻っていた。

煙は1分ほどで薄らいだ。その時、茅原は不意にはげしい不安に襲われた。ヤンの顔も険しい。二人は、まだ煙の残る部屋に戻り、はやる気持ちでそれぞれ手荷物を確認した。

茅原の大事なノートブックは無事だった。ヤンの方も

部、再構成した。明日、こちらから直接、特許事務所に送っておく。日本で出願可能な国際出願にするから、段取りは早いね。あつというまにカタが着くと思う。データファイルを開けるカギはFAXしたURLの掲示板にアップしとく。よろしく。』

「なんとなく、妙だな」

「明日までの重要データなんて、死んでるようなアドレスに送りますか？」飛田の問いかけは挑発的にも聞こえる。

「互いの緊急時、または秘密裏のアドレスじゃないのか？」と室長。

「データ漏洩が疑われたサーバーを経由して、わざわざですか？」

ふたたび飛田が、念を押すように問いかける。

「それに日本人同士ならあえて、重要な秘密のデータ、なんて文中に書くでしょうか？」女性のアナリストが指摘した。

「なにか、こちらの動きに感づいたんでしょうか」若い男のアナリストがそう言いかけたとき、室長が結論を下した。「とにかく、これはだれかを誘っているんだ！今夜、なにか動きがある！Qにそう伝える。県警とのラインも確保しておけ」

バッグを覗いてほっとしているようだ。

と、遠くから消防と警察のサイレンが聞こえた。

やはりまずいことになった。茅原は今夜、戸乃浦への出張で、別のホテルに泊まることになっている。事情聴取はごめんだ。とにかくタクシーを呼び、自分だけでもここを離れなくては、とヤンに告げた。

「さあどこで、だったろう」と、件のビジネスホテルに向かうタクシーの中で、茅原は思った。さっきの女従業員、どこかで会った気がしてならなかった。

Scene 1-5 誘い

分析官が不審なメールのやり取りを確認した。主任は室長に報告し、緊急のミーティングを要請した。

「浅井の行動がおかしいんです」

「具体的には？」と室長。

「茅原にメールを送っているのですが、もう何年も使われていないアドレスです。その内容は例の特許の件です」。

飛田がメールを音声化した。

「ファイルが整った。重要な秘密のデータも添付する。第3実験室に移された古いサーバで、これまでのデータを全

Scene 6 夜の対決

南国の雨の夜は蒸し暑い。エアコンが切れた夜の実験棟は、こころなしか空気が重い。

ピッ！

開錠の電子音がして引き戸がゆっくり開いた。小柄な人影が闇を透かし見るようにゆっくりと奥に進む。天井が高く、ただ広い実験室の暗闇のあちらこちらで、緑や赤に光るLEDが点き、消え、辺りを鈍く、断続的に照らす。スクリーンセイバーだけを映し続けているPCと、計器が押し込まれたアングルの棚の間を、人影は進んでいった。

「はっ、とLEDのペンライトが点いた。「しずかに！」と書いた紙を照らしている。

「誰？」小さくかすれた、番場の声だった。

「おれ！」浅井の声だった。

「一体、なんのマネだよ。あの掲示板の書き込み。」

「お前なら、分かってくれると思った。賭けだよ。俺たち共通の知人が、現れるか、現れないか・・・」

入り口からは死角になる部屋の隅に、二人は息を潜めていた。締め切られた南国の実験室で、夜がじつとり流れて

ゆく。

カン！ 小さな音だった。さらに小さく、キ・と上の方で何かがきしむ音がした。その高さ10m近い天窓が開き何か、いや人影が、糸を出しながら降下するクモのように、音もたてず同じ速さで下りてきた。何かを手にして左右に振っている。赤外線ライトだ。当然、暗視野ゴーグルを付けているのだろう。ラックやデスクの間を歩き来してパーティション囲いの一画に入り、古いサーバーの前で止まった。ラインを確認して、接続されたキーボードとディスプレイを探し当てる。立ち上げた入力画面にいったIDは、茅原のものだった。しかし画面はなかなかそれを受け入れない。2分、3分、舌打ちが聞こえる。

と、けたたましい防犯ベルが実験棟の外で鳴りはじめ、広い室内の照明が一斉に点いた。跳ねるように立ち上がった人影は、出口を求めて周囲を見回し、仁王立ちの浅井と目があつた。

「はい、そろそろ終わりにしようか。いくら打ち込んでも、そのコードじゃログインできないよ。」

使い込んだ木刀を片手に、浅井が言い放った。扉の前には、金属バットを持った番場がいる。

「君は茅原じゃない。誰なんだ」

対峙した人影は、上から下までタイトな黒づくめだった。頭はすっぽり目だし帽で覆い、額まで覆う薄型の電子ゴーグルを付けている。細身でくびれた体型は女性のようなだが、肩つきや足の筋肉の張りから、かなり鍛えていることが伺えた。

何かを持った手が、そこをどけ、というように左右に振られた。

「せつかく来てくれたんだ、もう少しおはなしできないかな。間もなく、きのう増員されたばかりのお迎えが5, 6人来るし。」

黒づくめが左腕に巻いた薄い液晶画面をちらと覗いた。

「警報解除はできないよ。古い手動の防犯ベルなんですね。」

ちつ、と舌打ちが聞こえ、黒い腕が腿のホルダーから薄刃のナイフを出して、かざした。

「やっぱりね。斉藤さんを襲ったのもお前か」浅井が木刀の先をさげて構える。

右手にナイフを持った人影が突進する。間合い2mを切ったところで相手の額を打点に定め、浅井が一步踏み込む。それを察知した人影は右にひねった体を投げ出し、ナ

イフが浅井の足を襲った。とっさに左足を引いた浅井の木刀が床に20cmをすくい上げるように振り払うと、手首に当たった切っ先がナイフをきれいに弾き飛ばした。痛そうに右手をおさえて立ち上がろうとする人影に、再び木刀が振り下ろされる。その刹那より早く、一步すり寄った賊が左足を蹴り出す。足刀が浅井の右脇腹に食い込んだのと、木刀の先が受けた左手ごと賊の頭部に達したのはほぼ同時だった。浅井は体を折って倒れ込み、賊は頭を押さえて転がった。

「コ・ロ・ス・」

立ち上がって低く呻いた声は、女の声だった。苦しさに負けて、割れたゴーグルと目だし帽を取ったその顔には、たしかに見覚えがあつた。

「顔見たの、残念だったネ」いつも見ていたのとは全く違う、別人のような表情のヤンだった。「お前ら、死ぬことになった」

逃げようとして開錠を焦る番場に駆け寄って、髪の毛を掴んだ。右手には拾い上げたナイフがある。

「さあ、アクセスコードはなに？」

「も・う・す・く・守衛・が・来る」震えながら言う番場に、ヤンが嗤って答えた。

「来ないネ、ほうら、もつともつとタイヘンな警報が鳴り始めたヨ」

みなが沈黙した一瞬の、凍りついた静寂の中で、幻聴にも似たかすかな電子警報音が遠くから聞こえた。火薬庫の火災警報だ！

「ちくしょう！ デタラメ警報はお前のせいだったのか！」

そう番場が呻くと、片膝ついた浅井が怒鳴った。

「オレたちを殺せば、お前が欲しいデータは永遠に出てこない」

ヤンが勝ち誇ったように叫ぶ。

「そうならそれで、もうイイ。どうせここが丸ごと消える」

「どういう意味だ！」浅井が怒鳴り返す。

「何トンもの火薬 入ったテストエンジン、降ってきたら、どうなるか？」

ヤンの目が野獣のように嗤って、ナイフが番場の首筋に延びる。

「そんな実験、聞いてない！ はったりだ！」浅井が叫ぶ。

その時、浅井の視野の上の方で何かがかすかに動いた。

パンツ！ なにかが、はじめて、そちらを向いたヤンの右ひざに何かが高速で当たった。

ぐきつ、と、鈍くていやな骨の音がした。

ヤンの体はバランスを失って、床に崩れた。人影が飛ぶように天窓から降り、走り寄って、ナイフを蹴り上げ、ヤンの側頭部には弧を描いた踵を叩き込んだ。ヤンは吹っ飛んで倒れ込んだ。番場の足下に転がっているのは、ハリントンのトラックボール。かすかに漂っているのは“火工品の臭いだろうか。

「大丈夫？遅くなつてゴメンなさい、ちよつと手間取つて」

抱き起こされた番場の、焦点が定まらない目の先に、どこか見覚えのある女の顔があった。

「その声は、足立さん？」その背中に向けて浅井が言う。

少し焦点の合った番場の目には、左の耳元に小さなホクロが見えた。

「その顔！マリリン？」番場が叫ぶ。

「私はLIE SA、情報安全局のエージェント」落ち着いた声が答える。

ヤンが壁を支えに立ち上がり、絞り出すように叫んだ。

「やっぱりアンタか。あやしい、思ってた！！」

ヤンが腕から外したフレックス・タブレットに何かを打ち込んだ。

「これでオシマイさ、お前らも、あたしも！！」

屋外で警報が重奏し、警報アナウンスがはじまった。「退避してください。発射実験15秒前。」

LIE SAが腕に着けたタブレットに触れながら、立ち上がる。

ヤンが叫ぶ。

「そのけが人、連れて、逃げるのムリだね。半径100mは、火の海よ！」

《10・9・9》

「はったりだ！」叫ぶ番場。

ヤンは逃げるそぶりもない。LIE SAも動かない。

《6・5・4・3》

「こいつ本気だ」再び叫ぶ番場。

《2・1・1》

《点火！》

なにかとてつもなく大きなものが、無音でヤンの背後に立ち上がった。

パーーン。実験室内に大きな音が響いた。カーボン樹脂のアームが一举に延びて、宇宙帆船の帆がヤンを覆う。

LIE SAが駆け寄ると、扉が開いて県警署員が十数人、なだれ込むのは、ほぼ同時だった。

「くつつそー！これ、クローンかよ！！」ヤンがタブレットを握りつぶした。その切れ切れの画面には“Sorry to

disappoint you.”(おめいごんやめ)

まり、ポソつとつぶやいた。

「あ・・・彼女、三つ星の株も買うつもりだったのかなあ・・・」

Scene 17 報告書

室長がモニターでQのメールを読んでいるところに、飛田主任が最終レポートを持って入ってきた。

「クローンPC作成の目的は、センターへのネット侵入や特許の妨害、奪取だけが目的じゃなかったんですね」

「ああ、例の旧サーバーや、三つ星社内のネットへの侵入計画も想定内だったかな」

室長が向き直って、言った。主任はレポートを手渡して、「まさか株の予測解析がお目当てだったとは・・・ですわね」と小さくため息をついた。

窓辺に立ったまま、最終レポートにパラパラと目を通して室長は「まあ、茅原がスパイの仲間でなかったことは、幸いだったがね」と言い、それをボンとデスクに投げ戻した。

「浅井がこちらの動きを少しばかり分析してたのも想定外でした。スカウトしたいくらいですね。」

軽く会釈して部屋を出たところで、主任はふと立ち止

初夏の陽ざしが当たるレポートを、省エネファンの風が

めくった。

『Case JASPA

PROTECTION

COMPLETED

Rpt. by

Licensed Inspector of E-Safety Agency No.12』